

校異源氏物語・こうはい

その比按察大納言ときこゆるは故致仕のおとゝの次郎なりうせ給にし右衛門督のさしつきよわらはよりらうくしうはなやかなる心はへものし給し人にて成のほりたまふ年月にそへてまいていとよにあるかひありあらまほしうもてなし御おほえいとやむことなかりける北の方ふたり物し給ひしをもとよりのはなくなり給ていまものし給は後のおほきおとゝの御むすめまきはしらはなれかたくしたまひしきみを式部卿の宮にて故兵部卿のみこにあはせたてまつり給へりしを御子うせ給て後しのひつゝかよひ給しかと年月ふれはえさしもはゝかり給はぬなめり御子はこ北のかたの御はらに二人のみそおはしければさうくしとて神仏にいのりていまの御はらにそおとこ君ひとりまうけ給へるこ宮の御かたに女きみひとゝころおはすへたてわかすいづれをもおなしことおもひきこえかし給へるををのく御かたの人などはうるはしうもあらぬこゝろはへうちましりなまくねくしきこともいてくる時ゝあれと北の方いとはれくしくいまめきたる人にてつみなくとりなし我御かたさまにくるしかるへきことをもなたらかにきゝなしおもひなをし給へはきゝにくからてめやすかりけり君たちおなしほとにすぎくおとなひ給ぬれは御裳なときせたてまつり給七間のしむてんひろくおほきにつくりて南おもてに大納言殿おほいきみ西に中の君ひんかしに宮の御かたとすませたてまつり給へりおほかたにうちおもふ程はちゝ宮のおはせぬ心くるしきやうなれとこなたかなたの御たから物おほくなとしてうちくのきしきありさまなと心にくゝけたかくなともてなしてけはひあらまほしくおはすれいのかくかしつき給きこえありてつきくにしたかひつゝきこえ給人おほくうち春宮より御けしきあれと内には中宮おはしますいかはかりの人かはかの御けはひにならひきこえむさりとておもひをとりひけせんもかひなかるへし春宮には右大臣殿のならふ人なけにてさふらひ給はきしろひにくけれとさのみいひてやは人にまさらむとおもふ女こを宮つかへにおもひたえてはなにのほいかはあらむとおほしたちてまいらせたてまつり給ふ十七八のほとにてうつくしうにほひおほかるかたちし給へり中の君もうちすかひてあてになまめかしうすみたるさまはまさりてをかしうおはすめれはたゝ人にてはあたらしくみせまうき

御さまを兵部卿の宮のさもおほしたらはなとおほしたる此わか君をうちにてな
とみつけ給ふ時はめしまとはしたはふれかたきにし給心はへありておくおしは
からるゝまみひたいつき也せうとをみてのみはえやましと大納言に申せよなど
の給かくるをさなむときこゆれはうちゑみていとかひありとおほしたり人にお
とらむ宮つかひよりは此宮にこそはよろしからむをんなこはみせたてまつらま
ほしけれ心ゆくにまかせてかしつきてみたてまつらんにいのちのひぬへき宮の
御さまなりとの給ひなからまつ春宮の御ことをいそぎ給てかすかのかみの御こ
とはりも我よにやもしいてきて故おとゝの院の女御の御ことをむねいたくおほ
してやみにしなくさめのこともあらなむとこゝろのうちにいのりてまいらせた
てまつり給ついとゝきめき給よし人ゝきこゆかゝる御ましらひのなれ給はぬほ
とにはかゝしき御うしろみなくてはいかゝとて北のかたそひてさふらひ給は
まことにかきりもなくおもひかしつきうしろみきこえ給殿はつれゝなる心地
して西の御かたはひとつにならひ給ていとさうゝしくなかめ給ひんかしの姫
君もうとゝしくかたみにもてなし給はてよるゝはひとゝころに御とのこも
りよろつの御ことならひはかなき御あそひわさをも此方を師のやうにおもひき
こそてそ誰もならひあそひ給ける物はちを世のつねならすし給て母北のかたに
たにさやかにはおさゝさしむかひたてまつり給はすかたはなるまでもてなし
給物から心はへけはひのむもれたるさまならすあい行つき給へることはた人よ
りすくれ給へりかくうちまいりやなにやと我かたさまをのみおもひいそくやう
なるも心くるしなとおほしてさるへからむさまにおほしさためての給へおなし
ことゝこそはつかうまつらめとはゝ君にもきこえ給けれとさらにさやうのよつ
きたるさまおもひたつへきにもあらぬけしきなれは中ゝならむ事は心くるし
かるへし御すくせにまかせてよにあらむかきりはみたてまつらむのちそ哀にう
しろめたけれとよをそむくかたにてもをのつから人わらへにあはつけきことな
くて過し給はなんとうちなきて御心はせのおもふやうなることをそきこえ給
いつれもわかす親かり給へと御かたちをみはやとゆかしうおほしてかくれ給こ
そ心うけれとうらみて人しれすみえたまひぬへしやとのそきありき給へとたえ
てかたそはをたにえみたてまつり給はすうへおはせぬほとはたちかはりてまい
りくへきをうとゝしくおほしわくる御けしきなれは心うくこそなときこえみ
すのまへにゐる給へは御いらへなとほのかにきこえ給御こゑけはひなとあてにを
かしうさまかたちおもひやられて哀におほゆる人の御ありさまなりわか御姫君
たちを人におとらしと思おこれと此君にえしもまさらずやあらむかゝれはこそ

世中のひろきうちはわつらはしけれたくひあらしと思にまさるかたをものつか
らありぬへかめりなといと、いふかしう思きこえ給月比なにとなく物さはかし
き程に御ことのねをたにうけたまはらてひさしう成はへりにけりにしのかたに
侍る人はひわをこゝろに入て侍るさもまねひとりつへくやおほえ侍らんなまか
たほにしたるにきゝにくき物のねから也おなしくは御心とゝめてをしへさせ給
へおきなはとりたてゝならふ物侍らざりしかとそのかみさかりなりしよにあそ
ひ侍しちからにやきゝしるはかりのわきまへはなにことにもいときなうはは
へらざりしをうちとけてもあそはさねと時々うけ給御ひはのねなむ昔おほえ侍
る故六条院の御つたへにて右のおとゝなんこの比よにのこり給へる源中納言兵
部卿の宮なに事にもむかしの人におとるまじういと契ことに物し給人々にてあ
そひのかたはとりわきて心とゝめたまへるをてつかひすこしなよひたるはちを
となとなんおとゝにはをよひ給はすと思ふ給ふるを此御ことのねこそいとよく
おほえ給へれひはゝおしてしつやかなるをよきにする物なるにちうさすほとは
ちをとのさまかはりてなまめかしうきこえたるをんなの御ことにて中／＼をか
しかりけるいてあそはさんや御ことまいれとの給女房などはかくれたてまつる
もおさ／＼なしいとわかき上臘たつかみえたてまつらしと思はしも心にまかせ
てゐたればさふらふ人さへかくもてなすかやすからぬとはらたち給わか君うち
へまいらむとゝのひすかたにてまいり給へるわさとうるはしきみつらよりもい
とをかくみえていみしうゝつくしとおほしたり麗景殿に御ことつけきこえ給
ゆつりきこえてこよひもえまいるましくなやましくなときこえよとの給てふえ
すこしつかうまつれともすれは御前の御あそひにめしいてらるゝかたはらいた
しやまたいとわかきふえをとうちゑみてそうてうふかせ給いとをかしうふい給
へはけしうはあらず成ゆくは此わたりにてをのつから物にあはするけなり猶か
きあはせさせ給へとせめきこえ給へはくるしとおほしたるけしきながらつまひ
きにいとよくあはせてたゝすこしかきならい給かはふえふつゝかになれたるこ
ゑして此ひんかしのつまに軒ちかき紅梅のいとをもしろくにほひたるをみ給て
おまへのはな心はへありてみゆめり兵部卿宮うちにおはすなりひとえたおりて
まいれし人そしるとてあはれひかる源氏といはゆる御さかりの大将などにお
はせし比わらはにてかやうにてましらひなれきこえしこそよとゝもに恋しう侍
れこの宮たちを世人もいとことにおもひきこえけに人にめてられんとなり給へ
る御ありさまなれとはしかはしにもおほえ給はぬは猶たくひあらしとおもひき
こえし心のなしにやありけんおほかたにて思いてたてまつるにむねあくよなく

かなしきをけちかき人のおくれたてまつりていきめくらふはおほろけのいのちなかさなりかしとこそおほえはへれなときこえいてたまひて物あはれにすく思ひめくらし、ほれ給つゝの忍かたきにや花おらせていそきまいらせ給ういか、はせんむかしの恋しき御かたみにはこの宮はかりこそはほとけのかくれたまひけむ御名こりにはあなんか光はなちけんをふたゝひいて給へるかとうたかふさかしきひしりのありけるをやみにまとふはるけところにきこえをかさむかして

こゝろありて風のにほはすその、梅にまつ鶯のとはすやあるへきとくれな

ひのかみにわかやきかきてこのきみのふところかみにとりませおしたゝみていたしたてたまふをおさなきこゝろにいとなれきこえまほしとおもへはいそきまいりたまひぬ中宮のうへの御つほねより御とのるところにいて給ほとなり殿上人あまた御をくりにまいる中にみつつけ給てきのふはなといとゝくはまかてにしいつまいりつるそなどの給ふとくまかて侍にしくやしさにまたうちにおはしますと人の申つれはいそきまいりつるやとおさなけるものからなれきこゆうちならて心やすき所にも時々はあそへかしわかき人どものそこはかとなくあつまる所との給ふこの君めしはなちてかたらひ給へは人々はちかうもまいらすまかてちりなとしてしめやかに成ぬれば春宮にはいとますこしゆるされためりないとしけうおほしまとはすめりしをときとられて人わろかめりとの給へはまつはさせ給しこそくるしかりしかおまへにはしもときこえさしてゐたれは我をは人けなしと思ひはなれたるとなことはり也されとやすからすこそふるめかしきおなしすちにてひんかしときこゆなるはあひ思ひ給てんやとしのひてかたらひきこえよなどの給つゝいてにこの花をたてまつれはうちゑみてうらみて後ならましかはとてうちもをかすくらむすえたのさま花ふさ色もかも世のつねならすものに、ほへるくれなゐのいろにとられて香なんしろきむめにはおとれるといふめるをいとかしこくとりならへてもさきけるかなとて御心とゝめ給ふ花なれはかひありてもてはやし給こよひはとのゐなめりやかてこなたにをとめしこめつれは春宮にもえまいらす花もはつかしくおもひぬへくかうはしくてけちかくふせ給へるをわかき心地にはたくひなくうれしくなつかしうおもひきこゆ此花のあるしはなと春宮にはうつろひ給はさりしらす心しらむ人になとこそきゝ侍しかなどかたりきこゆ大納言のみ心はへはわかゝたさまに思へかめれときゝあはせ給へとおもふ心はこにしみぬれは此かへりことけさやかにもの給やらすつとめてこの君のまかつるになをさりなるやうにて

花のかにさそはれぬへき身なりせはかせのたよりをすくさましやはさて猶

いまはおきなどもにさかしらせさせてしのひやかにとかへすくの給てこのき
みもひんかしのをはやんことなくむつまじう思ましたりなか／＼こと方のひめ
君はみえ給なとしてれのはらからのさまなれとわらは心地にいとおもりに
あらまほしうおはする心はへをかひあるさまにてみたてまつらはやとおもひ
りくに春宮の御かたのいと花やかにもてなし給につけておなしこと、は思な
らいとあかすくちおしければ此宮をたにけちかくてみたてまつらはやとおも
ひありくにうれしき花のついてなりこれはきのふの御かへりなれはみせたてま
つるねたけにもの給へるかなあまりすきたる方にすゝみ給へるをゆるしきこえ
すとき、給て右のおとゝわれらかみたてまつるにはいと物まめやかに御心をさ
め給ふこそをかしけれあた人とせんにたらひ給へる御さまをしゐてまめたち給
はんもみどころすくなくやならましなとしりうこちてけふもまいらせ給ふに又
もとつかのにほへるきみか袖ふれは花もえならぬ名をやちらさむとすき
／＼しやあなかしことまめやかにきこえたまへりまことにいひなさむとおも
ふところあるにやとさすかに御心ときめきし給て

花のかをにほはす宿にとめゆかは色にめつとや人のとかめんなど猶心とけ
すいらへ給へるを心やましとおもひる給へり北のかたまかてたまひてうちわ
たりのことの給ふついてにわか君の一夜とのひしてまかりいてたりしにほひの
いとをかしかりしを人はなをとおもひしを宮のいとおもほしよりて兵部卿のみ
やにちかつきゝこえにけりむへ我をはすさめたりとけしきとりえんし給へりし
かこゝに御せうそこやありしさもみえさりしをとの給へはさかし梅の花めて給
ふきみなれはあなたのつまの紅梅いとさかりにみえしをたゝならておりてた
まつれたりしなりうつり香はけにこそ心ことなれはれましらひし給はんをんな
なとはさはえしめぬかな源中納言はかうさまにこのまじうはたきにほはさて人
からこそよになけれあやしうさきの世の契いかなりけるむくひにかとゆかしき
ことこそあれおなしはなの名なれと梅はおひいてけむねこそ哀なれ此宮な
とのめて給ふさることそかしなと花によそへてもまつかけきこえ給ふ宮の御か
たは物おほしするほどにねひまさり給へれはなにこともみしりきゝとゝめ給は
ぬにはあらねと人にみえよつきたらむありさまはさらにとおほしはなれたりよ
の人も時による心ありてにやさしむかひたる御かた／＼には心をつくしきこえ
わひいまめかしきことおほかれと此方はよろつにつけ物しめやかにひき入
給へるを宮は御ふさひのかたにきゝつたへたまひてふかういかてとおもほし
なりにけり

わかきみをつねにまつはしよせ給つゝしのひやかに御文あれと大納言の君ふかく心かけきこえ給てさも思たちての給ことあらはとけしきとり心まうけし給をみるにいとをしうひきたかへてかう思よるへうもあらぬ方にしもなけのこのの葉をつくし給ふかひなけることゝ北方もおほしの給ふはかなき御返りなどもなければまけしの御心そひておもほしやむへくもあらすなにかは人の御ありさまなどかはさてもみたてまつらまほしうおひさき遠くなどはみえさせ給になと北方おもほしよる時くあれといいたう色めき給てかよひ給ふしのひ所おほく八の宮の姫君にも御心さしのあさからていとしけうまうてありき給たのもしけなき御心のあたくしさなともいとつゝましければまめやかにはおもほしたえたるをかたしけなきはかりに忍てはゝ君そたまさかにさかしらかりきこえ給ふ